

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

何故、今、仏教哲学なのか？と問えば、世界総人口約67億人すべてが混沌とした将来の予測、予想すらつかないすべて総素人の時代に突入したことはじまるとは、物事の道理、基本的な英智を求めるところにあった。全く未経験の時代に突入したのである。

仏教の世界は、雲水（行雲流水の如く、ゆくえの定まらない遍歴修行する行脚僧）に代表される如く、各地の名僧を訪ねて広く英智を求め姿勢がその基本にあるからである。

それは、常に進歩、向上が原点にあるということ、例えば、正法眼蔵（辨道話）の教えにみられる「本来の面目」では、人それぞれが、それぞれの置かれている立場で最善の人間としてのあるべき姿で努力せよ、邪心をすて八正道（正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）に徹せよという物の見方、考え方、いわゆる正しい見解、決意、言葉、行為、生活、努力、思念を教えているからである。

いわゆる現状に対し、変化を知り、変化を生かすために自己変革、変えあためる教えが重要なのである。したがって、これからの情報技術化社会にあっては、昔は余りすすめられなかったが、「朝令暮改」も「朝改暮変」もありうるということである。

「見機而変」、いわゆる「機を見て而して変化する」という考え方、「臨機応変」の時代に変化したということである。「機に臨み変に応じて適宜な手段で対応する」スピードが必要な時代なのである。

結果として、＜孔子曰＞「過而不改、是謂過矣」の教えの如く（過ちて改めざる、是れを過ちと謂う）、人間である限り、あやまちのないものはない、だが本当

のあやまちとは、あやまちと知りながら反省を怠り、なお改めないことだということである。

したがって、全世界総人口は約67億総素人、未経験のグローバル化、ポータレスワールドの時代に対する物の見方、考え方として、「古今無二路」、「薬師如来と仏教医学」、「仏教説話集の教え」について述べ、あらゆる分野において、経営者や管理者は「百不知、百不会」、いわゆる「何も知らず、何も会得していない」己れの実力を知り、勉学、努力、向上する実践を行いたいものである。

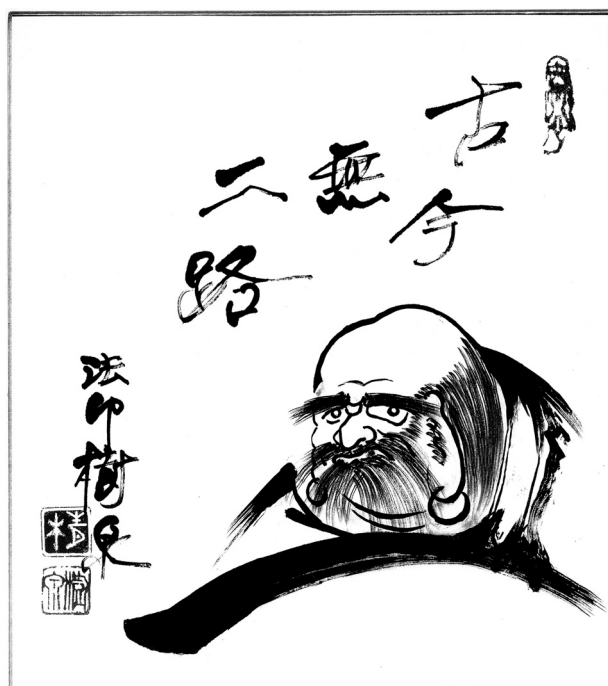
自分の専門外に対しては、謙虚に人の教えを聞く耳を持ちたいものである。

尚、八正道については、エレクトロヒート162号（平成20年11月号）に詳細を述べているので参照されることをお願いしたい。

2. 古今無二路を実践する

「古今無二路」とは、仏教で古くから教えられている言葉で（古今に二路なし）と読む、その教えの大意は「時代がどのように変化しても、昔から現代にいたるまでに二路、いわゆる二つの道はなく、ただ一筋の道、いわゆる一つの生き方、正道しかない。如何にそのやり方は異なっても賢者の行く道、生きるべき道は今も昔もただ一つだ」という教えである。

一般に正道とは正直道、直道ともいい人として行くべき道、いわゆる正当な道理のある実践すべき道をさすのである。



著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉